

BAMBOO HOUSE PROJECT

発行日：2021年3月31日



この写真は、11月、12月の週末WSで補修を行ったバンブーハウス2号とハンモックである。

どんな活動？

・BAMBOO HOUSE PROJECTとは全国的に問題となっている日本の放置竹林、ここ滋賀県湖南市の放置竹林もまた、同じ問題を抱えていた。鬱蒼とした竹林は不法投棄のゴミで溢れ、やがて近隣の住宅街にまで竹が侵入し、地域住民の悩みの種になっていた。そこで、菩提寺まちづくり協議会から指導教員の陶器浩一教授のもとにこの竹林をこどもたちが集まる場所に依頼があった。

こうして、2012年から「バンブーハウスプロジェクト」が開始した。当初は湖南市の助成制度である「きらめき湖南」の中に組み込まれ、3年計画であった。プロジェクトの目的は、竹林整備を通して、地域住民が触れ合える空間や機会をつくることである。この2012年～2015年の3年間の間に、菩提寺竹林の全体計画を行い、地域の人々が交流できる場を整えた。よって、今では荒れ果てた竹林が放課後にこどもたちが遊びにきたり、近所の親子が散歩しにきたり、公園のような場所になった。春にはたけのこ掘りのイベントが行われるようになった。

しかし、竹林は毎年の定期的な伐採と公園のメンテナンスが必要不可欠であり、地域交流という点からも長期的なスパンで今後も関わっていくことが望ましいと考えられる。また、今までの活動が菩提寺の甲西北中学校に認められ、中学校の総合学習の時間をお借りして、共同で竹林整備を行えるようになった。地域と大学での竹林整備のサイクルと地域交流の継続的なあり方を模索できたらと考える。

変わり続ける「竹の庭」



今年度は昨年度までとは異なり、週末の短い時間を利用して秀を行ったため、計画的に内容を決めて事前準備を行ったうえで作業にとりかかった。また過去の制作物「竹旋門」が今年度に撤去されたことにより、「竹の庭」が手前側（バンブーハウス1号）と奥側（スクリーン）で分断されていた状態だったのを人を導く形状にした新築の制作を検討していたがコロナウイルス感染拡大により来年度以降に持ち越しとなった。

しかし、この検討は無駄ではなかった。現地での作業ができない中で今後どういった場所へ変化させるのか、他の竹建築をどのタイミングで解体し再構築するのか地域の方々と共に検討し、変化もあわせて「竹の庭」全体の姿を計画していくことができた。

これからの活動でも、竹建築の姿・形は変わっていくと考えられるが、モノが変化しても場所としてはいい環境を残していく。



この「竹の庭」が地域の人々に愛され、地域に寄り添ってこの場が続いていくように、これからも継続して活動を行いたい。（上部の写真3枚は週末秀の時に学生たちが環境整備の竹切り及び、バンブーハウス2号と老朽化したプランコの解体を行っている様子）

さらに魅力的な「竹の庭」へ

「竹林マップ更新と未来を見据えた新たな計画」



竹の庭も当初の全体計画に比べるとバンブーハウス1号の解体もあり、現在の竹の庭は大きく変わってきた。そこで全体計画を組み直すことで新たな竹の庭を提案することを目的に竹の庭を5回ほどに分けて、実測調査を行った。新たな計画を行う場所を中心に実測をすることで1月以降の全体計画に役立てることができた。また、地域の方々にも週末秀の合間には竹の庭の現状とこれからの展望を聞くことができ、全体計画の大きな軸を定めることができた。また、来年度以降2年から3年を見据えて、新たな制作物を全4か所に提案することを予定している。この提案を4月の初旬に地域の方たちに発表することで、来年度以降の新たな竹の庭を語る場としても大切な機会になると考えている。

竹林を巡る「竹の庭」に行こう



「竹の庭」を維持していくためには、地域の皆様に愛される場所となる必要がある。そこでBAMBOO HOUSE PROJECTをより多くの人に知ってもらうために地域の方々と協力して、広報活動やサイン化計画を行っている。これは地域に「竹の庭」とプロジェクトの活動について知ってもらう興味を抱いてもらうことと、竹林整備事業の一つのモデルケースとして同じ境遇の人などを知ってもらうことの2つを目的としている。



今年度の週末秀で、地元の家族連れや散歩中にたまたま興味をもってくれた地域の方々が竹の庭を訪ねてくれて、交流することができた。今後も広報活動は続けていき、足を運んでくれる人を増やしていきたい。（上部の写真2枚は地元の子供たちが補修を終えたハンモックやスクリーンで遊んでいる様子）

地域の方からの声

平成32年度から菩提寺まちづくり協議会が借用して管理しています菩提寺の竹林に、滋賀県立大学の皆様と共同で始めたバンブーハウスプロジェクトも今年で8年が過ぎようとしています。今期は、新型コロナウイルスの影響で、学業にも大きな影響があった事と推察します。

バンブーハウスプロジェクト皆さんも、思うような活動が出来ない年になったかと思えます。そのコロナ禍の中、8年前に製作した1号機も補強や、修理を毎年行っていたいただきましたが、老朽化を迎え、安全の為に解体する事となりました。長年竹林の入り口に船が空中を浮いているようなシンボリックな建造物が、消えてしまう事は大変寂しい思いです。新型コロナウイルスの終息は、まだ遠慮しいとは思いますが、今後活動ができる範囲で1号機の跡地に、地域の皆さんがくつろげる施設の製作を学生の皆さんと作っていきたいと思います。ほぼ毎日の事と思えますが、地元の子どもたちが、竹林に遊びに来ています。

これからも皆様のご協力よろしくお願ひします。

菩提寺まちづくり協議会 地域活性化委員会 委員長 浅井 基義

March 31, 2021

AKARINCHU NEWS

あかりんちゅとは

あかりんちゅでは、「エコでスローな夜を」をモットーに、寺社などからやむなく廃棄されてしまう蝋燭、通称「残ろう」を回収・再利用し、手作りキャンドルの販売、キャンドルナイト・キャンドル作り教室の開催を行っています。

OKB street 7th Candle Night

12月4日に岐阜県大垣市のOKB street7周年記念イベントにキャンドルナイトを行いました。あかりんちゅは有難いことに、OKB street が出来て以来毎年呼んで頂いています。今年の規模は例年と同様の1000個でした。18時からセレモニーが開始



となり、多くの方が見に来られました。今年はキャンドルで象るものに「幸福」の花言葉をもつ四葉のクローバー、魔除けの意味をもつという六芒星、そしてこのOKBstreetさんでのイベントの際いつもお世話になっているお店の名前にあやからせて頂いた「蝶」と、コロナ禍の時事的な状況や土地に関わるものなど、特に工夫を凝らしたラインナップにしました。

地域の声

広場のキャンドルが並ぶ中に入ってみると、ひとつひとつが放つ熱や光を直に感じられ、いまや日常でなかなか触れる機会のない火そのものの力に魅了されました。不思議と寒さも、それまでの気忙しいさも忘れていました。

(OKBstreet ご依頼者様)

キャンドルを見る機会は少ないが、とても癒される。

(キャンドルナイトへの訪問者さん)

あかりんちゅ自慢！

あかりんちゅの自慢といえば大きく言えば3つあります。

まずはSプロジェクトであること。基本的にはイベントを行った際の依頼料と販売の売上金で活動しています。

二つ目は県内外、どこへでも行って活動できること。材料は自分たちが全部持っていくため、体験教室は平らなところとコンセン
トが1つあれば活動できます。このため、様々な人との交流の機会があります。

3つ目は様々な団体との関わりがあること。近江楽座の団体からキャンドルナイト用のロウソクを作ってくださる福祉団体のジョブカレさん、残ろうを集めてくださる滋賀教区浄土宗青年会さんなど、2つ目に挙げた特性上、様々な人と関わって活動していける団体です。

成果と課題

今年度はコロナ禍でなかなか活動できない状況が続いた。そこで SNS のアカウントの運営を開始したりオンライン新歓に参加したりネット上での活動を積極的に行った。「活動の仕組みや過程」を何らかの形で残し、外部に発信する方法を考えていきたい。

近江楽座

とよさと快蔵プロジェクト

タルタルーガ、 リニューーアル

豊郷町にあり、毎週土曜日に学生が運営しているバー・タルタルーガの改修作業を行なった。ここは十五年前の先輩が蔵を改修して作った場所であり、経年劣化や設備の使いにくさがあった。そこで、新型コロナウイルスに伴う店舗の休業に合わせて、タルタルーガのリニューーアルオープンに向けた改修作業を行なった。

キッチンのカウンター前に設置した吊り棚や、入り口に置くすのこの制作をした。また内装だけでなく、タルタルーガで出すメニューもリニューーアルオープンに向けて新しく考案した。今は試作段階だが、今後の営業再開に向けてメニュー表作りやメニューアル作りなど、準備が進められている。



作成中の吊り棚（上）と完成したすのこ（下）



近江楽座

とよさと快蔵プロジェクト

ところで、これは少し自慢になるのですが、私たちとよさと快蔵プロジェクトは今年一七年度を迎えました。これは近江楽座と同じ年数で、実はとよさと快蔵プロジェクトは近江楽座ができた初年度から存続する、いわば古株なのです。また古民家の改修自体はそれよりも前から行っているというお話もあります。これからも変わらず豊郷町に貢献できるように頑張ります。

とよさと快蔵プロジェクト

私たちのプロジェクトは、地域の人と協力しながら豊郷町にある空き蔵や空き家を地域資産として捉え、学生なりの視点で改修・再利用し、まちを元気にしているというモットー

で活動している。地域でのイベントに積極的に参加したり改修した物件でのイベントを主催したりして、地域と深く関わりたいと考えている。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、例年の半年遅れで新入部員を募集した。前期は授業がオンラインで行われ、対面での説明会ができなかったにも関わらず、建築デザイン学科と生活デザイン学科を中心に、多くの一回生が体験会に参加し、入部してくれた。体験会では、一回生主体での棚と傘



→作業体験の様子



→街歩きの様子



→新入生対象の体験会の様子(10/18,10/25)

よひこそー一回生

地域の声

私は今も豊郷町にあるシェアハウスに住みながら、まちの方々や現役の学生たちと関わっているOBの宮崎です。今年度はコロナの影響により、とよさと快蔵プロジェクトの学生と地域との関りが希薄になってしまった一年だったと思います。

来年度以降は私のようなまちに残っているOB・OGたちで、学生とまちとの懸け橋になればと考えています。来年度からも現役学生たちとまちを盛り上げていきます。

今年の活動を振り返って

今年度はコロナウイルスの影響もあり、完璧に満足いく活動ができたとは言えない年でした。しかし、このいわば足踏みの年はプロジェクトを見直し、体制を整えるいい機会になったと思います。私自身は来年度も一般メンバーとして参加するので、今から来年度の活動が楽しみです。

(代表 岡田龍介)



近江楽座 ボランティアサークルHarmony 「障害者の生涯学習支援活動」に係る 文部科学大臣表彰を受賞！！



令和二年十一月九日（月）に令和二年「障害者の生涯学習支援活動」に係る文部科学大臣表彰を受賞しました。ボランティアサークルHarmonyは、平成十五年（二〇〇三年）四月に結成されました。きっかけは、平成十四年に結成された障がい児・者の保護者さんの達による団体『NPO法人ディー』が黒田先生（元人間文化学部教員）に相談されたことからでした。当時、一回生であった西澤真志さんを中心に、メロディーの専属ボランティアとして、メンバーが集まりました。当時は、大学院生もHarmonyに加入していたそうです。

その後、近江楽座のプロジェクト団体から外される等の困難がありました。が、十七年間、障がい児・者の自立支援及び共生社会に向けての活動を行ってまいりました。

令和二年十二月八日（火）に本学の交流センターにて伝達授与式が執り行われました。学長や後援会長などの大職員の方々、メロディーの保護者の皆さん、報道関係者の方々にご参列していただきました。

また、令和三年一月十五日（金）に、滋賀県知事の三日月大造さんを始めとする県庁職員の皆様方に受賞報告をいたしました。県庁に就職されたHarmonyの先輩とお話することができ、よかったです。（下の写真は、受賞報告会での記念撮影の様子です。）



滋賀県知事への受賞報告 2021年1月15日
ちよつときいてよ！プロジェクト自慢

気軽にミーティングタイム！

毎月一回行っている「定例会議」。従来は、湖風会館にて午後九時から一時間半程度、本団体の代表と会計、そしてメロディーの藤堂裕美理事長と後藤真吾先生、元Harmonyの西澤真志さんの五名で話し合っておりました。

今年度は、コロナの影響もあり、Zoomで開催し、従来の会議よりも多くの部員が参加できるようになりました。今後もしかりと思っております。

プロジェクト紹介 Harmonyとは？ ～創作活動とイベント～

今年度の活動

定例活動

お茶体験（現在、中止中）
油絵・粘土制作のお手伝い

イベント企画

クリスマスコンサート（今年度はZoomとYouTube live）
冬のお泊り会（今年度は中止）
バス旅行（今年度は中止）

その他

定例会議（月1回）
受賞報告会

Harmonyでは、毎月一回、土曜日の十二時半から十六時半まで活動しております。活動内容は、障がい児・者の油絵・粘土制作のお手伝いや抹茶とお菓子をいただくお茶体験です。今年度は、コロナ禍の影響で、お茶体験が中止となり、定例活動が十二月のみとなりました。

イベント企画として、毎年『Harmony & Me Today』クリスマスコンサートを開催しております。今年度は、ZoomとYouTube liveで行い、百八十名の方に参加していただきました。また、SNSでのアーカイブ配信も行っております。次年度は、是非とも交流センターで行いたいです。

～今年度は、コロナの影響で前期が遠隔授業となり、後期から再開されました。九月下旬から一定例活動作品展を湖東地域四か所で開催しました。SNSでも宣伝し、多くの方に作品をご覧いただきました。

～課題としては、初めてのオンラインイベント開催で少壮メンバーはありましたが、成果はありました。十二月からは、文部科学大臣賞関係や今年度の定例活動等が今年度の活動を決めていきます。

～今年度は、コロナの影響で前期が遠隔授業となり、後期から再開されました。九月下旬から一定例活動作品展を湖東地域四か所で開催しました。SNSでも宣伝し、多くの方に作品をご覧いただきました。

～課題としては、初めてのオンラインイベント開催で少壮メンバーはありましたが、成果はありました。十二月からは、文部科学大臣賞関係や今年度の定例活動等が今年度の活動を決めていきます。

2020/11/28
13:10～

第18回
HARMONY
&
MELODY
クリスマス
コンサート



↑動画QRコード

左図は、二〇二〇年十一月二十八日（土）に開催した第十八回のクリスマスコンサートです。QRコードから動画ファイルを再生できます。

地域の声
Harmonyと歩んだ十七年

振り返れば、特別支援学校の小学部に通う我が子の将来を憂える親が集まって活動が始まりました。初めは親の子ども活動を考えて一緒に活動してくれたいという活動をするときに、一緒に活動してくれたいという活動をするときに、一緒に活動してくれたいという活動をするときに...

新しい活動様式

チームのビッグニュース

近江楽座団体の滋賀県大生き物研究会(以下、生き物研)は対面授業が実施されなかった前期の間活動が実施できていなかったが、後期からの対面授業の再開に伴い、9月から活動を再開した。今年度の活動は新型コロナウイルス感染症防止の対策を講じた「新しい活動様式」となった。

生き物研 9月から活動再開

生き物研の「新しい活動様式」は、メンバーの事前の健康チェック、マスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保、移動時の分散、オンラインツールの活用など感染拡大防止に取り組みながら活動す

るものである。対策を実施しながら行う活動では、神上沼の調査や駆除の活動の時間がこれまでよりも短くなってしまうなどの課題はあったが、活動回数は昨年と同程度行うことができた。また、今年

度は前期対面授業が実施されなかったことや近隣府県の緊急事態宣言の発出、外来魚情報交換会など参加予定だった外部イベントの中止により、地域の方や大学外部の団体との連携が難しかったが、オ

ンラインツールの活用などにより、これまでになかった新たな活動も始められた。環境教育動画の制作(詳細は左の記事)やZOOM勉強会などによって接触機会を減らしつつ、水辺の外来生物の問題の環境啓発活動、団体内での神上沼の生き物の知識の共有なども継続できた。

プロジェクト紹介

我々は、県大から近い内湖である「神上沼」をフィールドとして継続的に外来生物の駆除活動および在来魚のモニタリング活動を月に1〜2回行った。今年度の駆除活動では、これまで行ってきた投網に加え、釣りによる駆除も行った。



神上沼の外来魚(ブルーギル)(2020年10月18日撮影)

また、我々は内湖をはじめとする水辺の再生には子どもたちが水辺に興味を持つことが必要であると考え、小学生を対象にした環境教育用教材として環境教育動画の制作を行った。これによって子どもたちに身近な環境問題について知ってもらい、環境に対する意識の向上に努めた。



滋賀県大生き物研究会の皆様方におかれましては、コロナ禍とはいえ、様々な活動や情報発信を行われており、その活躍ぶりにはいつも感心し、頼もしく拝見させていただいております。

さて、今年度、当土地改良区におきましては、貴研究会に生き物観察会の講師をお願いしております農業体験活動「水土里ふれあい体験」を始め、小学校を対象とした学習会等も開催を自粛いたしました。来年度におきましても、不特定多数を募集対象とする農業体験活動は、引き続き開催を自粛する見込みであり、学習会等も開催が難しい状況となっております。当土地改良区管内に広がる農村環境は、様々な水環境を有しています。神上沼を含む河川、排水路、水田に至るまで、様々な魚類、水生生物が自生しており、固有種の存在を脅かす外来種も多く存在しています。生き物観察会は、参加者が生態を知るだけでなく、地域環境を知り、地域を護るきっかけとして、最良なものと考えております。次回の当土地改良区イベント時にも、お力添えの程よろしくお願いいたします。今後とも皆様方の益々のご活躍を応援しております。(愛西土地改良区 魚住様)

自慢環境教育動画を制作



動画投稿サイトYouTubeに投稿された生き物研の環境教育動画(2020年12月20日投稿)

十二月、生き物研は、小学生程度の子どもに向けて、外来生物とはどのような生物か、外来生物を採った場合の注意点などを紹介する環境教育動画を制作し、同月二十日にインターネット上で公開した。

この活動の背景として、毎年、地域の方々に水辺に関心を持ってもらうために実施している愛西土地改良区や小学校な

どの生き物観察会が、今年度はコロナ禍および前期対面授業中止に伴い実施できなかつたということがある。そのため、大学外部の方との直接の接触が生じず、季節を選ばない手段として環境教育動画を制作した。動画の内容は、大学のキャラクターである「ケンちゃん」と近江楽座のキャラクターである「メイミー」の対話形式で

進行し、外来魚を釣った「ケンちゃん」に対して「メイミー」が外来生物とはどのようなものか、外来生物を採った場合の注意点、外来生物が生態系や人間活動に与える影響などを教えるというものである。

成果と課題

今年度は新型コロナウイルスの非常に大きな影響を受けた年度であった。そのなかでも、4月から7月までの大学の閉鎖によって、我々の活動1年で最も活発になる時期に、様々なイベントのみならず、毎月の神上沼での定例調査までもが実施できなくなってしまう。そのぶん、9月からは感染拡大防止対策をとる新しい活動様式で再開し、昨年度の同時期よりも活発に活動ができたと考えている。また、YouTube、ZO

SNSなどで情報発信中!

新入生向け情報

LINE

公式アカウント

QRコードから友達追加↑

Twitter

QRコードからフォロー↑

Instagram

QRコードからフォロー↑

活動ブログ

外来魚ひとりごと

QRコードからアクセス→
または「外来魚ひとりごと」🔍

かみおかべ古民家活用計画

-Sleeping Beauty-

竹柵が完成

10月下旬、古民家の中庭と隣家との間に

竹柵が完成した。

ベストハウスネクスト株式会社さん協力の



もと、木材で柵を作り、そこにカットした竹を張り付けて柵を作成した。竹は、地域のお祭りで元々使用されていた、廃棄予定だったものを譲り受けた。

作業はベストハウスネクスト株式会社さんのスタッフさん2名とプロジェクトメンバー2名で行った。繊細で重要な工程はスタッフさんにやっていただきつつ、スタッフさんたちの丁寧な指導のもと、木材への塗料塗りや木材のカット、ビス打ちなどの作業はプロジェクトメンバーも行う。

朝から作業を始め、夕方には風情ある竹柵が出来上がった。

柵には扉もついていて、内側から鍵をかけることもできる。作り

たてピカピカの様子は大満足の出来上がりだったが、今後、月日と

共に色味が落ち着き、さらに風情ある様子になっていくと思うとそ

れも楽しみである。

プロジェクト紹介

かみおかべ古民家活用計画-Sleeping Beauty-は彦

根市上岡部町にある一軒の古民家を拠点に活動して

いる。

プロジェクトの柱となるのは、①古民家改修、②ひょうたん栽培・加

工、③古民家でのイベント開催、の3つの事業。

2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響でイベント開催はでき

なかつたものの、古民家の改修は行うことができた。また、ひょうたん

の栽培は、当時古民家に住んでいたプロジェクト代表と、毎年力をお借

りしている地域のひょうたん名人とで行うことができた。



地域の方の声

地域行事への橋渡しをしていただいた、上岡部町の自治会長、赤田薫

さんからは以下のようなコメントをいただいた。

「今年度は残念なことに新型コロナウイルスの影響で古民家再生計画の活

動をあまりすることが出来なかつたと聞いており、上岡部町の人が集ま

る行事も軒並み中止にするしかありませんでした。そんな中、古民家活

用計画の皆さんには、祭りで使った後の捨てる予定だった木材を利用し

て古民家の竹柵を作っていたいただきました。今もなおコロナウイルスが猛

威を振るっている状況ではございますが、来年度も宜しくお願いいたし

ます。」

成果と課題

今年は新型コロナウイルスの拡大を防ぐため、例年のように

様々な地域の活動や、イベント事を自粛する必要があり、あ

まり活動を行うことが出来なかつた。しかし、ひょうたん栽

培や、改修作業など例年よりも活動量は少ないものの出来

ることはあつた。

来年も世の中がどのようなようになっていくか先が見通せない

状況ではあるが、そのような中でも自分たちが出来ることを

しっかり見つけていき、有意義な活動をしていけるよう頑張

っていきたいと思う。

フ子自慢

拠点とする古民家には昔の時代の品物が多く眠っ

ていて、離れには昔のラジオや扇風機、教科書、チラ

シなどが展示されている。眠っている品物はいまだ数

知れず・・・

どこか宝探しのようなワクワク

感を覚えてしまう。いつか全貌を

解き明かしてみたいものである。



フラワーエネルギー

「なの・わり」



チームのビッグニュース

小学校出前授業にて、

搾油体験を実施

二〇二〇年十月十四日に草津市立渋川小学校にて、同校6年生三クラス約百名を対象に出前授業を行った。この取り組みは、次世代を担う小学生に、環境・エネルギー問題に興味、関心を持つてもらおうことを目的として行っている。今年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響があったものの、対策に万全を期したことで、無事に感染者を出すことなく安全に実施することができた。



▲環境・エネルギー問題について熱心に話を聞く小学生たち

今回、新たな授業内容として、ひまわりの種の搾油体験を実施した。小学生たちが収穫したひまわりの種を、我々が所有する搾油機で油を搾る作業について、小学生に体験してもらった。身近にある植物がエネルギーになる様子を見てもらうことで、身近にあるエネルギーについて学んでもらえたと思う。進学する際には工学やエネルギーについて興味を持ってもらえれば幸いである。

地域の声

学生の皆さんが立ち入ってくれたおかげで町内が明るく活気づき、作付けすることで景観もよくなることができました。」

当初より、約十五年余り変わらず今日に至っています。長い間学生さんもなれない作業でしたがご苦労様でした。」



▲ひまわりの種搾油体験の様子

プロジェクト自慢

二〇二〇年六月に三津町にある学外畑と工学部棟の学内畑にて菜種の収穫を行った。収穫量は二十二キログラムとなり、昨年に引き続き、上場の収穫量となった。ここ数年で土壌の改善に取り組んできた結果が表れてきたことを感じ、継続することの大切さを身染みて感じた。



▲肥料まきをする後輩とそれを見守る先輩(学内畑にて)

一方、地元協力者の方の高齢化や学生側の負担を考慮した結果、今年度の収穫にて学外畑での活動が終了することとなった。長い歴史を刻んできただけに、非常に残念ではあるが、これまでの経験を、これからもしっかりと受け継いでいきたい。

プロジェクト紹介



▲今年度の菜の花の開花

フラワーエネルギー「なの・わり」は、植物を使った資源循環型社会の形成を目指したプロジェクトである。主な活動は、菜の花を栽培し、収穫した種からバイオディーゼル燃料を作っている。また、この取り組みや環境問題を小学生・高校生に知ってもらうために、出前授業や高大連携授業を行っている。加えて、科学実験の楽しさを体感してもらうイベントを各地で開催している。出前授業の依頼も募集しているので、ぜひブログにコメントを。

成果と課題

今年度の成果は、出前授業での新たな取り組みの成功があげられる。課題として、新型コロナウイルスの影響もあつたが、一年を通して、活動回数も減ってしまつたことがあげられる。厳しい状況においても活動を続けられるような工夫が必要である。

座・沖島新聞

Vol.05 2021.3.15



座・沖島とは…

本プロジェクトは「まなぶ・まじわる・ささえる」を目標に活動している。主に、島民にどんな活動をしてほしいか、私たちに協力できることがあるかをヒアリングして、より沖島に根差した活動を目指している。お祭りや小学校行事などのお手伝いや、座・沖島が主体となっておこなった写真展などの活動を通して、メンバーが沖島について理解を深め、沖島の活性化の方法を島民と探っている。

沖島ゴミ拾い

毎年行ってきた清掃活動だが、今年度はコロナの影響でゴミ拾いができなかった。沖島の湖岸に打ち上げられる多くのゴミを回収して綺麗にしようという思いと、活動を通して、座・沖島を島民の方に知ってもらおうという目的で行っている。ゴミはまだまだ多いので、継続して定期的にゴミ拾いを行っていききたい。

発足5年を終えて

前年度は発足して4年ということで、役割分担に力を入れた。広報や会計などの役職や、イベントごとの担当を決めることで、仕事がメンバー全体にいきわたる機会が多くなった。そこで、より大所帯での活動となったので、様々な視点からの意見や、アイデア出しなどが増え、活動にも大きく影響した。県を挟んだ協定式や、全国的な会議に参加するなど、活動の幅も増えた。5年目は、更なる仕事の分担と、積極的な交流を深めることのできる活動をしていきたい。

今年度のスケジュール

- 11月 新入生歓迎
- 12月 農作業
- 12月 農作業
- 1月 農作業
- 2月 農作業

沖島のお祭りのお手伝い

今年度はコロナの影響で祭りが開催できなかった。しかし、今後は祭りの手伝いなどを通して沖島の文化や風習を知り理解しつつ、沖島の島民の方とこれからも交流を深めていきたい。

沖島住民の声

座・沖島の学生さん達が、春の大祭や運動会に参加して下さることで、高齢者の進んだ沖島の行事に活気が生まれます。また、学生さん達の若い力と笑顔で沖島を元気づけてくださっています。座・沖島の皆さんは、今や沖島になくはならない存在です。これからもよろしくお願ひします。

政所茶新聞

発行
政所茶レン茶[®]-

滋賀県立大学
近江楽座
活動報告新聞

政所茶のPR活動

新しい販売方法の模索

今年度は新型コロナウイルスの流行により、例年の販売活動を行うことが難しくなっています。イベント出店をはじめとした試飲販売の機会が少なく、新たな販売方法を模索する必要に迫られました。



まず、ネットショップをはじめました。対面での販売が難しいので、家からも注文していただけるよう皆で運用をしてみました。しかし、シヨップを開いたとしても、勝手に売れるほど甘い物ではなく、広報には例年以上に力を入れることが求められます。まずは知ってもらい、興味を持って頂いて、購入をしていただくという流れをスムーズに作れるように話し合い、試行錯誤の1年間となりました。



滋賀県とは「しがのふるさと支えあいプロジェクト」の協定を結ばせて頂いた関係で、活動取材していただいたり、お茶の専門家と一緒して、日本茶についての知識を付けることにも挑戦しました。お茶の知識は販売するときや、日々の畑作業にも大いに生かすことができるため、これからも定期的に皆で学んでいこうと思います。

1年間の畑作業と苦勞

私たちの活動のメインとなっているのは茶畑の維持管理です。彦根から車で約1時間かけて通っています。畑作業はお茶摘みをはじめめたくさんあります。お茶摘みは今年、一般客の招待を控えたため、例年よりも静かな作業となりました。新茶摘みが終わると番茶刈りをしました。天候に恵まれず、例年よりも収穫量が少なくなりました。また、大変良いお茶が出来上がりましたが、この収穫の作業は比較的楽しく、やりがいもあります。



今年度はブルーメの丘にお邪魔して、政所茶の宣伝をさせて頂きました。ほらじ茶フテやコーヒーなど、喫茶店形式の営業もさせて頂きました。



ブルーメの丘へ



活動ができました。新入生にとって初めての販売でした。

地域の方の声

活動の多くが制限された中で、しっかりとお茶の生産をやり切ったことはとてもありがたく思います。毎年のように交流会や夏祭りなど、一緒に活動する場面は少なく、寂しかったですが、また状況が良くなれば楽しく頑張ります。

新入生もたくさん活動に参加して頂いているようで、とても嬉しいです。またお会いできるのを楽しみにしています。

活動成果と課題

今年度はたくさんの方があったりと、活動をしていて悩みの尽きない1年間となりました。ただ、この状況を逆に利用してできることは積極的に挑戦していきましました。この経験は来年度以降の活動にも生かせると思います。課題としては、地域の方との関りが減ったことで、より地域に密接に関わることができませんでした。感染症が落ち着けば、また地域に出かけたいと思います。

とよさらだプロジェクトだ新聞



2021年3月31日

発行

とよさらだプロジェクトとは

とよさらだプロジェクトは、滋賀県犬上郡豊郷町の耕作放棄地を活用し、地域の方にご指導をいただきながら、露地とビニールハウスにて野菜の栽培を行っています。年間を通して様々な野菜を栽培しており、普段なかなかできない農作業を地域の方々と交流しながら楽しく活動しています。また、とよさらだでは、現代の農業が抱える問題点に目を向け、地域活性化につなげていく事を目指しています。

玉ねぎ豊作！

今年度のとよさらだでは立派な玉ねぎがたくさん収穫されました！
例年であれば夏湖風祭にオニオンリングを出店するので、抜群のオニオンリングが提供できたはず：この悔しさを胸に、よりおいしい玉ねぎができるように頑張っていきます！



新メンバーがすごい

今年の新メンバーが、積極的に活動に参加してくれたことで、畑作業の参加人数が増えました。去年は、2、3人での活動が多かったのですが、今年は安定して5人程度は集まるようになりました。新メンバー加入により作業効率が向上しました。なんといっても草刈りのスピードが段違い！
新メンバーの今後の活躍に期待大です！

みかんへの挑戦

今年、新メンバーの希望により、新たに、みかんの栽培に挑戦しました。果樹の栽培は初めての挑戦でしたが、地元の農家さんにご協力いただき、実現しました。実がなるのはまだまだ先ですが、とよさらだとともに成長していくことを願います。

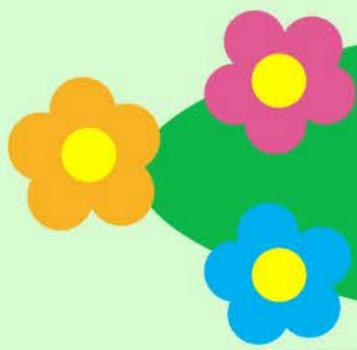


活動の振り返り

今年度の活動は、例年と違い、新型コロナウイルスの影響で、集まって作業することができない事や、イベントへの参加などが中止になる事もあり、例年通りの活動の様には行かなかった。しかし、新メンバーの積極的な活動への参加のおかげで、例年より畑の整備が効率的に進み、畑を広く使用することができた。また、今年は新たに果樹の栽培に挑戦することができた。今後も他の作物の栽培に挑戦していきたい。

地域の声

今年、去年よりも活動の参加人数が増えていくようで、良かった。大学生が農業に興味を持ってきてくれてうれしい。若い世代に農業を広げるように頑張りたい。水やりなどを平日などにもまめに行う等の工夫も必要だと思う。



おとくら新聞

発行日 2021年3月1日



おとくらプロジェクトってなあに？

おとくらプロジェクトは、「ギャラリー喫茶おとくら」を活動の中心として地域活動への参加、イベントの開催などによって高宮の地域活性化を目的としている団体である。喫茶運営が主な活動内容であり、シフト制でおとくらのメンバーがスタッフとして入っている。組織はイベント班、ギャラリー班、メニュー班、広報班に分かれている。それぞれイベントの企画・実行、毎月作家さんが変わるギャラリースペースでの展示、新メニューの考案、おとくら通信の発行や情報発信を行っている。

地域の声

今回はおとくらの家主であり、おとくらを最もよく知る応援隊長でもある加藤義朗さんからコメントを頂いた。加藤さんは、コロナのことを本当に悔やみ、悲しみに胸を痛めていた。しかし、新入生がたくさん入ってきてくれたことに対し、嬉しさも滲ませていた。

加藤さんは、「大学の課外活動中止により、ギャラリーもできなくなり大変な門出となりましたが、でも心配はしていません。若い力と継続してきた力おとくら12年目は、安心です。」とおっしゃった。

また、4代目メンバーの方が5年ぶりに、そして4回生が進路報告で来店し、おとくらのコーヒーを喜ぶ姿を見て、おとくら応援隊をやってよかったという実感を得た、という心温かい言葉を頂いた。

成果と課題

今年度は1回生が27名入り、おとくらプロジェクト内がとても賑やかになった。その一方で、コロナ禍という状況にあり、思うようにいかない苦しい年であったと感じる。

コロナ禍の影響で高宮町の方との交流が激減してしまったことで、高宮町及び中山道を盛り上げるために自分たちが企画・運営する新たなイベントを行うことができなかつたり、昨年まで引き継いで行われてきたギターワークショップやおとくら寄席が実施できなかつたり、昨年からつながりを得ることができた高宮小学校の児童と関わる機会が失われてしまつたりと、さまざまな課題が残る。コロナ禍である以上、これまでのような活動を行うのは困難な状況ではあるが、今後は継続して行われてきたこれらのイベントの引き継ぎを丁寧に行っていくとともに、コロナ禍以前に行われていた各班での活動について全メンバーが把握し、コロナ禍が落ち着いた際に円滑に実施できるような状態を作っておくことが必要である。

おとくらプロジェクトは、多くの方に支えられて継続し、現在も成り立っている。社会情勢を鑑みるに、今後の活動について明らかなことを言うことはできないが、高宮地域の方と積極的に交流し、高宮地域の活性化を目指し、様々な面で貢献していきたい。



新入生歓迎会



応援メッセージ展示



メニュー考案会



ギャラリー輪々11月展示

ビッグニュースは…

1回生が27人おとくら新メンバーに！

1回生おとくら体験会の様子

新入生歓迎会や体験会を通して、1回生の勧誘を積極的に行った。



ちょっと聞いてよ！おとくら自慢

おとくらでは、喫茶活動に加え、地域の方々との触れ合いにも重きを置いており、同世代の学生だけでなく、おとくらの常連さんやイベントや授業協力で知り合った子供たちとも交流している。

地域コミュニティ内での交流の減少や、SNSによる間接的なコミュニケーションが増加している現代において、直接触れ合える機会があることは、おとくらの魅力であり自慢できる場所の一つである。

今はなかなか地域の方々との触れ合いが出来ない状況だが、収束したら、この期間中に離れてしまった距離を埋めるために、様々な活動を通して再び地域との密接な関係を築いていくと共に、おとくらプロジェクトが高宮の地域内コミュニケーションの仲立ちとなれるように今後も活動していきたい。

近江楽座TAGA-TOWN-PROJECT

コロナ禍に見舞われたTTP、2020年を振り返る！



2019年に実施した写真ワークショップで撮った多賀の写真。場所は、多賀大社に続く道『絵馬通り』だ。

Taga-Town-Projectは活動17年目！継続の秘密は、地元団体とのつながりが濃いこと

●TTPって何者？

Taga-Town-Project（通称TTP）が対象にするのは、彦根市の横にある犬上郡多賀町。モットーは『学生ならではの視点で、多賀の魅力を見・発信・発想すること』だ。近江楽座ができた時から17年継続してきた団体だが、年々メンバーの人数不足が懸念される。今は、人間文化学部2年の女子メンバー3人ができることを探しながら活動する。

今までのメインの活動は、多賀町をフィールドに思い思いの写真を撮る写真ワークショップや、その写真展の開催だ。また、2019年度は、町内の小学校で多賀の星空を観察する星空観察会も企画した。

●ちよつと聞いてよ！

TTPの特徴は、多賀町内の地元団体とのつながりが濃いことだ。例えば、多賀の食文化に特化した市民団体『YOBISHI（よびし）』からは、多賀のコメや味噌、野菜を使った食のイベントのお手伝いを依頼されることが多い。

また最近では、『YOBISHI』から派生した『桃原プロジェクト』から声をかけてもらう機会も増えてきた。桃原地区の伝統野菜である『桃原ごぼう』の収穫や、草木染めのイベントに参加した。

TTPがコロナ禍で新たに『字めぐり』を企画

●2020年のハイライト

TTPは2020年から新たな活動を企画した。それは、多賀町内にいまだに多く残る集落『字（あざ）』をメンバーが訪れることだ。その名も『字めぐりプロジェクト』。企画したきっかけは、新型コロナウイルスの影響で、今まで取り組んできた、多賀町内外の方向けのイベント企画が難しくなったからだ。そこで、『アウトプットができないならば、インプットの期間にしよう』、『メンバーの私たちが多賀のことをもっと知ろう』という意見がうまれたのだ。

近江楽座の活動に採択された2020年10月から約3カ月の間に、字めぐりは2回実施した。1回目は、10月18日の河内（かわち）だ。石灰岩の鍾乳洞『河内の風穴』に潜入し、洞窟の中でコウモリにも遭遇した。『多賀グリーン』と呼ばれる、青みがかかった澄んだ水に癒やされた。

2回目は、11月9日の桃原（もばら）だ。『桃原ごぼう』の収穫イベントにあわせて、その参加者とともに散策した。メンバーお手製のクイズペーパーを使って、桃原の魅力を探す時間になった。

●多賀町民からはどんな声？

前述した『桃原プロジェクト』を率いる中川信子さんは『TTPとこれからもコラボしていきたい』と語る。2019年度から、桃原ごぼうの収穫をTTPが手伝う機会があり、桃原プロジェクトのイベントに時々参加する。

また、2020年6月には、中川さんが司会を務める多賀町内の有線放送の番組に、ピンチヒッターとして呼ばれたこともあった。多賀町内の方に、TTPのメンバーや思いを声で伝えた。

地元の方にTTPを知ってもらい、さらに一緒に活動することは、イベント企画ができず地域の方と直接交流することが難しいコロナ禍でとても貴重な。

●課題が山積み

最大の課題は、今後のTTPの方向性が定まっていなかったことだ。メンバーが3人と少なく、またコロナ禍で活動に制限があるため、今できること・したいことは何かを改めて考え直し、メンバー内で意見を交換する機会があった。

まず決めるべきなのは、情報発信のターゲット。2020年度の活動採択時にこのことを指摘されたからだ。SNSのフォロワーを見ると、多賀町内の社会人が目立ち、逆に学生や若者は少ない。メンバーを増やすためにも、同年代にTTPを知ってもらうことが必要になる。

2つめは、TTPならではの活動を見つけること。町内とのつながりが強いことが裏目に出た場合、自分たちがしたいことを自分たちの力ですすめることが難しいと痛感したからだ。興味をもって取り組める、かつ無理なく続けられる独自の活動を、来は固めていきたいと検討中だ。



2019年、多賀町の観光スポット『多賀大社』に参拝したTTPメンバー。活動していくうちに、彦根から30分かけて自転車でも行く。

地域博物館 新聞

二〇二一年三月三十一日

地域博物館プロジェクトとは？

民具や古文書、お祭りなど地域には多くの文化財があり、それらは地域文化財と呼ばれます。その地域文化財や地域の歴史、文化などを住民の方々と共に調べ、地域博物館を作り上げていくことで地域の魅力の再発見をお手伝いしています。

主な活動

- ・白谷荘歴史民俗博物館（高島市マキノ町）調査、展示
- ・西川嘉右衛門家（近江八幡市）調査、展示
- ・東草野小中学校（米原市東草野）民具調査
- ・ビバシティ彦根（彦根市）博物館夏祭り出展

東草野の展示計画を進行中！！

旧東草野小中学校の教室に展示する予定の模型の製作を行っています。

山村景観の模型を作ること、は初めての挑戦なので、メンバーで話し合い、試行錯誤を重ねながら作業を進めています。

さらに、展示室の設計図の製作にも取り組んでいます。実際に旧東草野小中学校に行き、計測をしたり、写真を撮って展示室完成に向けて活動しています。

常設展示という大きなプロジェクトを任せていただき、展示室完成に向けて一から携わることが私たち学生にとってとても貴重な経験になると思っています。



製作途中の模型

地域からのコメント

新型コロナウイルスで学生活動も大変な時期です。

今年度は、計画的に活動が進んでいないですが、白谷荘歴史民俗博物館の調査・整理・維持・保存に貴重な休日の時間に携わっていただき、感謝します。現地に出向いて貴重な資料やそこで活動している地域の人に触れ合うことができて非常に貴重なことで有意義な時間です。この活動は地域の活性化、観光事業の推進にもつながります。又、皆様が社会人になられたときに必ず役立つものです。当館は皆様の助けで整理が進んでいます。有難うございます。少しずつ少しずつ皆様とともに資料の維持・保存・文化資料情報の発信、地域の活性化と前へ進めていきます。

ちょっと聞いてよ！ プロジェクト自慢！！

活動場所が県内各地に！

⇒近江八幡、高島、米原など活動拠点が滋賀県内各地にありいろいろなところに行けます。

貴重な史料をその手で触れる！

⇒実際に古文書などの史料を手にとって調査でき、ここでしかできない体験ができます。

成果と課題

今年度は、なかなか調査に出かけることも、作業をすることも難しい状況でしたが、例年の活動に加えて、新たな事業が始まったりと、新たな事に挑戦する年にもなりました。

東草野の展示事業では、設計図や模型を製作するにあたってわからないことも多く、なかなか進まないこともあったので、そこが課題であると感じました。

主な活動場所である西川家では、文書の整理、調査に加え、文書を保管している蔵に破損している部分があったので、修理を行いました。調査をするだけではなく、なるべく良い状態で大切な資料を残すことについても今後考えていくことが必要であると感じました。

田の浦まちづくりプロジェクト

田の浦ファンクラブ学生サポートチーム

ビュッティングイベント

二〇二一年三月十一日に「キャンドルイベント」田の浦」を行った。以前は現地に学生が赴き、震災の起きた時刻に鎮魂の祈りを捧げるイベントを行っていた。しかし、新型コロナウイルスの影響により、学生メンバーが現地



図1キャンドルイベント in 田の浦の様子

へ赴くことが困難となった。昨年度は東日本大震災から、一〇年目となる節目の年である。そのため、田の浦のみなさんと滋賀の学生メンバーをリモートでつなぎ、震災の追悼式を行った。震災から十年間の歩みを振り返り、それをYouTubeで配信し、より多くの方々と三月十一日の十四時四十分を共有できるよう努めた。滋賀と宮城県の田の浦という遠く離れた場所の時間を共有することで、田の浦の方々の思いと滋賀の学生の思いを共有し、より心のつながりを得られるイベントとなった。今後も、「コロナ禍の中で私たち田の浦ファンクラブ学生サポートチームが出来ることは何か、探していきたい。

地域の声

滋賀の学生たちともこの地元のおばあさま、お母さまたちとおちゃっこ飲み会を企画してやっていたんですけれどもこのコロナ禍のせいでそれが思うようにいかず、歯がゆい思いもしております。そういった中でも地元のコミュニティ(の発展)をさらに進めていきたいと思っております。 田の浦契約会会長 佐藤功一さん

キャンドルイベント「田の浦」でのコメントから抜粋

一言人物紹介

佐藤功一さんは田の浦の漁業権でつながる田の浦契約会の会長さん。田の浦ファンクラブが設立された当時からお世話になっている。

田の浦FCの学生サポートチームってなに？

田の浦ファンクラブ学生サポートチームは、東日本大震災の被災地支援を目的に設立された。今では、田の浦地区の方々と協力しながら、様々なまちづくり活動を行っている。現在は田の浦の方たちと細く長いお付き合いを育み田の浦を豊かな場所にすることを目的として活動している。他にも田の浦の魅力の発信や滋賀での防災活動も行っている。主な活動としては毎年、海を舞台にした海の大運動会を田の浦の漁港で開催し、三月十一日にキャンドル

ナイトを行なっている。活動を通し地域を盛り上げる大切さを学び、物理的な距離を超えた「つながり」をはくむことが出来ている。しかし、昨年度はコロナ禍により、毎月の田の浦への訪問が出来なかった。滋賀から出来る活動として「キャンドルイベント」田の浦」をリモートで開催し、滋賀から田の浦の方々と思いを共有した。他にも田の浦のおばあちゃんから教わったズンドコ節の体操を学生が踊った動画を作成し、田の浦のみなさんにお届けした。

ちよこちゃんとの交流の場 おちゃっこ会

滋賀県と宮城県の田の浦地区は大きく離れている。現地の方々とは一か月に二、三日程度しか会えないが、その期間での関わりは非常に濃く、印象深い。田の浦の漁師さんやおばあちゃんたちはいつでも優しく迎えてくれ、その笑顔に癒されると同時に、もっとより良い活動をしたと感じる。田の浦ファンクラブ学生サポートチームは活動を八年近く続けている。続けられ、コロナ禍であっても途絶えることがないのは、田の浦の発展に努める現地の方々や活動に熱心に協力してくれるおかげだ。漁師さんやおばあちゃんとの交流に興味を持った方にはぜひ私たちに力を貸してほしい。



図2 おばあちゃんとの交流の場 おちゃっこ会の様子

田の浦の紹介

田の浦は宮城県北西の海沿いに位置している。住民のほとんどが漁業権を持っているほど漁業が盛んでワカメやホヤ、ホタテの養殖が盛んである。田の浦と滋賀県立大学生の交流は震災直後の十年前から続いている。



図3 ワカメ養殖の様子

昨年度の成果と課題

昨年度は毎月行っていた定期訪問を十分に出来なかった。滋賀から田の浦のみなさんとながらにはどうすれば良いかを模索し、「キャンドルイベント」田の浦」として、遠隔での活動を実現することが出来た。しかし、滋賀での活動の希薄さを感じたため、滋賀での活動をより充実したものに出来るよう努めていきたい。



2011年9月に学生が撮影した気仙沼向洋高校



2019年3月10日、伝承館としてオープンした

震災から今年で丁度十年だ。この節目の年となる二〇二一年は、3月11日までの一週間で震災追悼ウィークとして、連日、東日本大震災の報道で持ちきりであった。竹の会所跡地近くにある、旧気仙沼向洋高校も、連日報道の渦中にある。この建物は、現在「東日本大震災遺構・伝承館」として、当時の震災の爪痕をできる限り保存して展示している。

この写真はブックレット冒頭のページにも掲載しており、この光景を学生が目撃した時に「地域のひとのために自分たちに何ができるか」という問いを二〇年掲げ、このプロジェクトは続いてきた。言わば、原点である。伝承館は、そのような当時の光景を出来る限り後世に伝えるために残っており、現在活動する学生たちにもこの原点を伝えてくれた。私たちがこの活動を後世に伝えるためにブックレットをつくらなければならぬ。私たちがしてきたことは、きつと明るいミライにつながっている。そう信じている。

東日本大震災から10年… 気仙沼の現在

たけとも便り

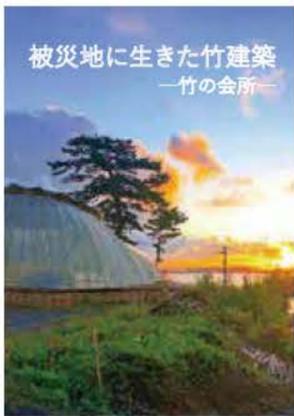
特別号
2021年3月31日
発行
文責: 牧田 弥果



会所ちゃん
竹の会所のイメージ
キャラクター

只今出版中!

「被災地に生きた竹建築」

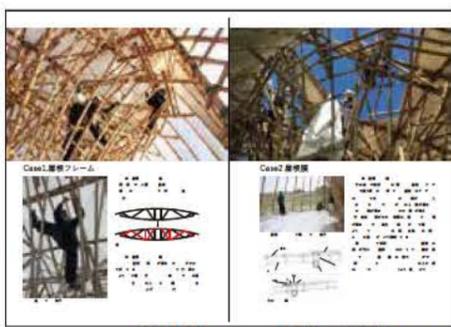


被災地に生きた竹建築
一竹の会所一

2019年に、竹の会所は学生の手で丁寧な解体された。解体する際に、竹の会所に関わった方から言っていた。「建築は無くならない、私たちがこれからは生きていく」という言葉に胸を打たれた私たちは、その言葉を形にして残したいと考え、活動の軌跡を本にまとめることにした。この活動を通して学んだことを後世に伝えるために、またこの場所を起った多くのものがたりをたくさんの方に知ってもらうために、本を出版する。

「たけともミライ」の活動目的は、住民同士が復興や生活について議論したり、教育、子育てを助け合ったりなど、生活に不可欠なコミュニケーションを再生、存続させる場をつくる手助けをすることである。これは行政や企業で優先的な支援を行うのが困難な問題で、その仕組みづくりのためのワークショップ運営と、竹の会所の維持管理が本プロジェクトの主な活動であった。この活動は、被災地の心の復興に尽力した数少ない活動の一つである。コミュニティを再生し伝承するために残してきた活動内容を後世に残すことで、今後同じような困難が起きたときに失われるコミュニティの数が減少することを目的として、これまでの10年間の一冊の本にまとめている。

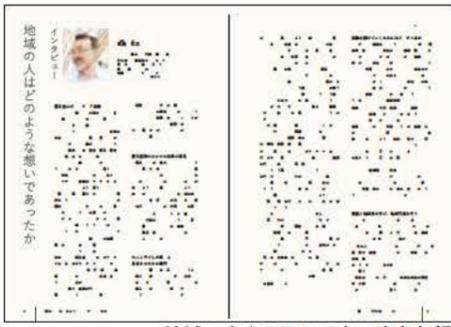
この本の内容には、竹の会所建設資料を掲載したページや、これまでたけともミライの活動で作成した資料やデータをもとに作るページ、10年分の写真を用いて作成したページなどがある。



竹建築についても詳しく説明している



もの、こと、ひとの3章立てで構成



地域の方やOB・OG方の声を取録



過去のポスターなどの資料を多数掲載

り、さまざまな観点からこの活動を見ることが出来る。全体の構成として、中心軸を竹の会所に設定し、モノ、コト、ヒトの観点から読み解いていくことで竹の会所、たけともミライのようなものがあったかを説明している。本活動で継続して行っていた場所づくりはモノ、お祭りはコト、地域との関わりはヒトの焦点から解き、活動全体を網羅する構成になっている。ブックレットの内容は、学生がつくるページだけではなく、地域の方や初代たけともミライ生など、たくさんの方からいただいた言葉も多数掲載している。その原稿の内容や本の中の位置関係なども、依頼した方々と一緒に議論した。普段よりご指導いただいている指導教員の先生方や地域の方以外に、OB・OG様方からも指導していただいたことが、私たちの知らない初代の内容に現実味を持たせ、全体的に均等な

内容に仕上げる事ができた。昨年の制作時当初に予定していた内容をはるかに超える大作に仕上がった。多くの議論を重ね、長い時間をかけてじっくりと構想を練ったおかげで、この活動において大切にしたいこと、伝えたい重要なことがしつかり記載され、10年間の活動のすべてがはつきり分かるメディアになった。この本は出版した後、これまでにお世話になった地域の方々や、竹の会所をずっと見守ってくださった町の方々、たけともミライ生にくださったOB・OG方、そして学生たちに配布される。それだけでなく、たけともミライの会所を知らない方たちにも手に取ってもらえるよう数店舗で扱っていただき、この活動で起きたことを知ってもらいたいと考えている。

運営再開!? たけとも

一竹の会所・友の会一

学生団体としてのたけともミライの活動は終息を迎えたが、これまでに関わってくださった先輩方と私たち現メンバー、そして地域の方々との交流は今後も継続される。この縁は途切れることは無く、どこまでも続いていく。すなわち、たけともという団体は今後も運営されていくのである。たけともは、元々は滋賀県立大学としての活動ではなく、他大でも参加する有志団体であった。その当時は、活動の参加者を多量に募集して、専用のホームページを設けて「たけとも」の会所・友の会」という会員の団体として運営されていた。年に2回開催されていたたけとも祭りは、地域の方と現学生が交流する場であったと同時に、卒業した学生が現地を訪れ、地域の方と再開する場でもあった。たけとも祭りは、同窓会の役割も兼ねていた。今後竹の会所に関わった人たちが集まる場を設けたい、その思いから、また「たけとも」の会所・友の会」は動き出す。これまで関わってくださった方全員の入会を予定している。



たけとも初代会長

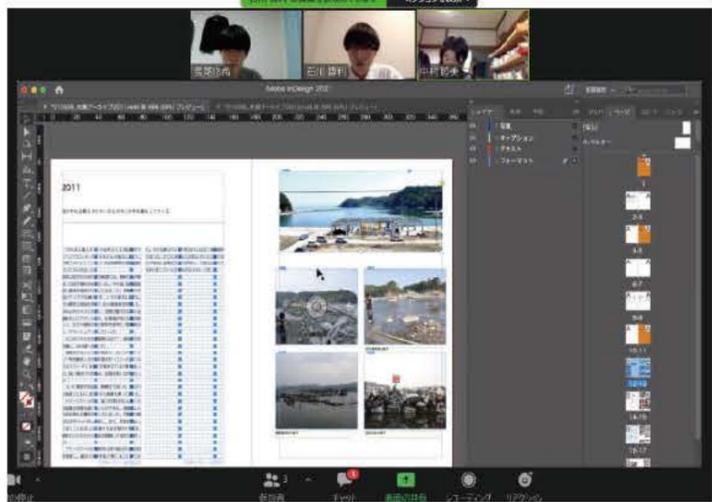
木興プロジェクト



東日本大震災では一五m近い津波が押し寄せた。死者一四人、行方不明者三人を出し五十五戸が被災した。田の浦は震災当初道路が遮断され陸の孤島となつてしまひ取り残された地区だった。

宮城県本吉郡南三陸町歌津田の浦。私たちの大学のある彦根からは約九〇〇km、車で走ること約一三時間を要する。リアス式海岸特有の優れた景観を持つ南三陸町の北西の沿岸に位置する。世帯数五六戸、人口一八一人（平成二七年七月三一日現在）で昔から漁業が盛んで漁業で生計を立てている家が多い。養殖業ではホヤ、ホタテ、ワカメが獲れ、沿岸漁業では刺網漁でマダラ、カレイ、アキガケ等が獲れることで知られる。

田の浦について

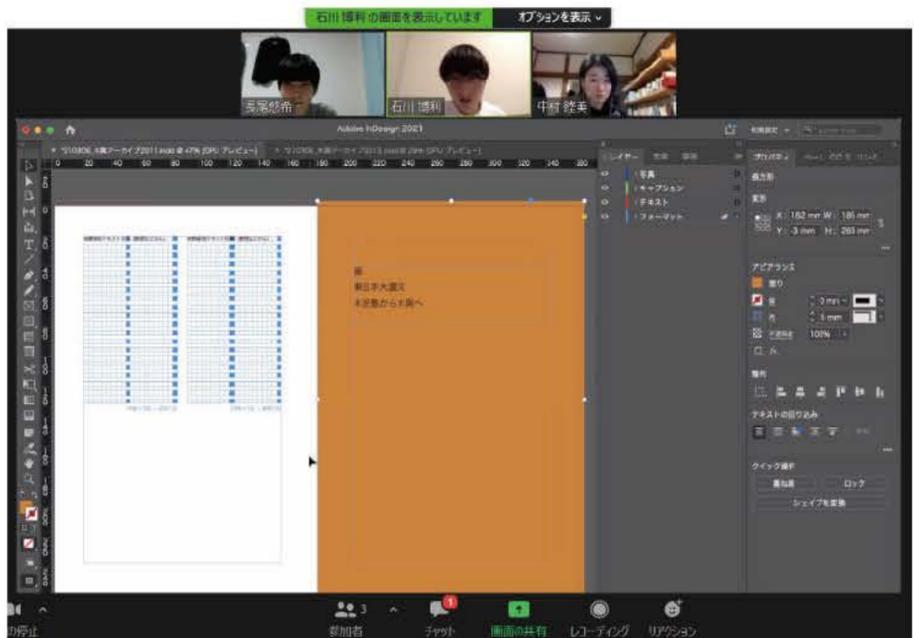


滋賀から通い続ける 木興プロジェクト

木興プロジェクトは滋賀県立環境建築デザイン学科・生活デザイン学科の学生による震災復興支援プロジェクトである。東日本大震災という未曾有の事態を目の当たりにし、建築やデザインを学ぶ私たちに何ができるのか、何かしなければという強い思いから立ち上げたプロジェクトである。結成より宮城県本吉郡南三陸町歌津田の浦で活動が続けており今年度で九年目を迎える。二〇一一年、漁師の方々への番屋建設に始まり二〇一二年に地域の集会所である三ー田の浦センター（以下センター）建設を行った。その後はセンター増改築等を行い、二〇一七〜二〇一八には鳥居、社の修繕を行った。田の浦との繋がりは現地で活躍されていた環人 ネット副理事長である田中光一さんの知人である気仙沼社会福祉協議会の方の紹介であった。

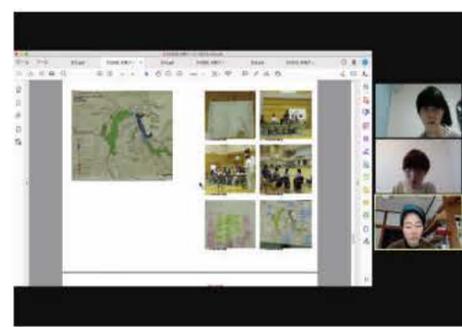
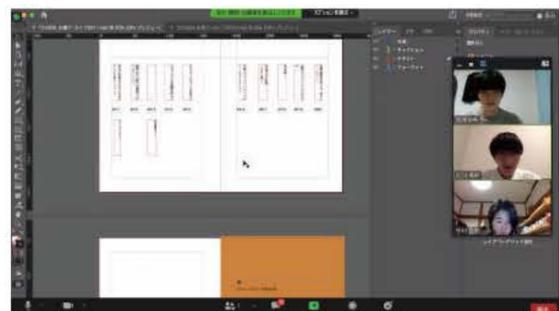


データ整理
データを把握・整理し資料をまとめ〇〇、〇〇の方の協力を経て木興プロジェクトの活動履歴に関して順を追って確認したことで書面や写真だけではわからないような過去の詳細な話やその活動に至る経緯なども聞くことができた。アーカイブ作成に直接的に関係するような内容が多くアーカイブ作成の際の意図や見せ方の再検討の必要性を感じた。



田の浦での活動を終え...
アーカイブ作成
震災から10年。現地でのものづくりを通じた直接的な復興支援ではなく、活動の節目としてこれまでの木興プロジェクトの活動のアーカイブ化を目指した。私たちが震災や過去の活動について知り、そこから得る追体験のようなことや当時の記録から分かる震災の教訓を得ることが目的のひとつとされた。アーカイブの完成を目指して今年度は活動してきたが現状まだ道半ばである。アーカイブ作成を通して点と点でしかなかった木興プロジェクトの各年度の活動や被災地の様子が見えたりと理解することができた。

今後もアーカイブの作成作業は継続して行い木興プロジェクトの活動をしっかりと記録として残して行きたいと考えている。



地域の声
・集まれる場が出来たし、集まる機会が増えた。若い人が来ることは嬉しいです。（佐藤功一さん）
・上の集会所も良いが、土足で使える場所は気が楽に使える、とおぼあちゃんたちが言っていました。（やすみさん）
・憩いの場が出来て色々集まれる。みんな明るくなって楽しくなった。（三浦清登さん）
十年目の成果とこれから
今年度は新型コロナウイルスに関係なく私たちの活動が主体となり現地に行かないということを決めた。しかし、いざ行かないとなると現地の方々に会いたい気持ちやコロナで行けないことへのもどかしさからアーカイブ作成の際のモチベーションを保つことがうまくできない一年であった。アーカイブの作成はまだ道半ばであるものの着実に進んでおりこれからも継続して編集作業を行いアーカイブを完成させたい。